

いにしえの映画つれづれ⑮ 「海底の黄金」お騒がせグラマー女優登場！

千葉豹一郎

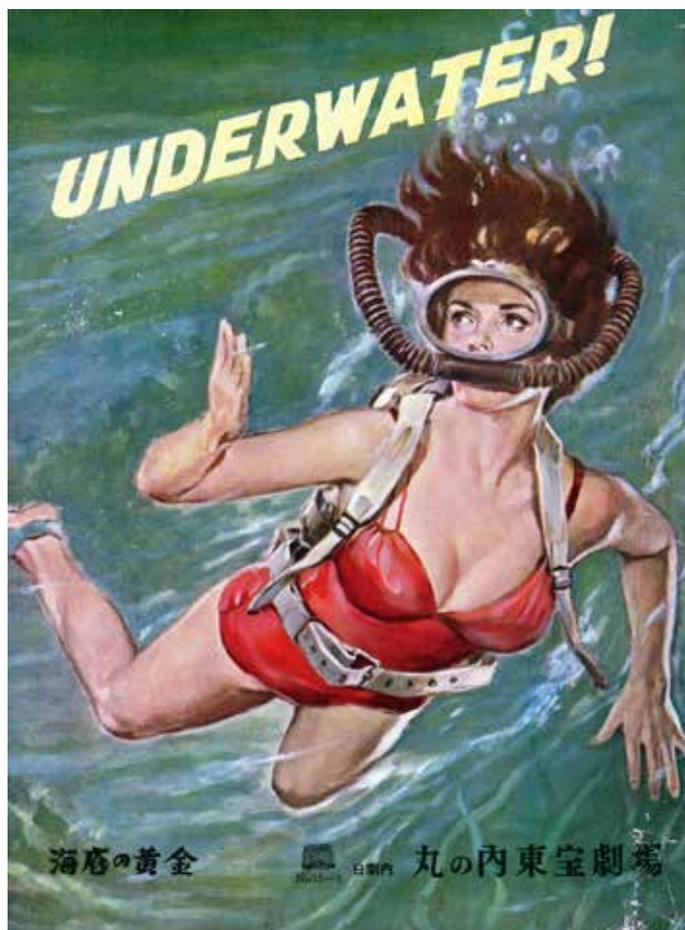
宝探しは、いくつになってもわくわくする。古くはハンフリー・ボガートの「黄金」(48)のような山中よりも、海の方がロマンがあって冒険心が刺激される。今回の「海底の黄金」(55)もそんな海洋宝探しの典型的な1本。かつては、夏になると同時代の「南海の黒真珠」(55)とよくテレビでも放映され、海への誘惑をかきたてたものだ。

「海底の黄金」は、かつてメジャーとして君臨し「キングコング」(33)や「市民ケーン」(41)等を制作したRKOが、20世紀フォックスのシネマ・スコープやパラマウントのヴィスタビジョンに対抗したスーパー・スコープの第1回作品。ワイド画面で撮られた初の水中撮影は全編の3分の1を占め、ア

クアラング(当時はアカ・ラングなどと表記されていた)笑)やスキューバ・ダイビングを世界中に普及させたといわれる。本作を語るうえで欠かせないのが、ベレス・ブラード楽団による主題曲「セレスローサ」。全米ヒットチャートで10週連続1位になり、マンボブームを巻き起こして映画のヒットに大きく貢献し、映画音楽の定番としても記憶されている。ブラード自身と楽団も出演して、劇中で演奏される。冒険心と海への憧れ、それにちょっぴりお色気もあって大人の寓話といえよう。お色気と言っても、今観ればいたって健全、健康な明るいものなので、子供にも安心して観せられる。

観客サービスに徹してメッセージ性は皆

無だから、とにかく単純に楽しめばいい!公開時のワールド・プレミアではフロリダ沖の海中に大スクリーンを設置して、観客はアクアラングを付けて水中で観るか、潜水艇の窓から観るかという大規模なもので話題には事欠かない。それというのも、当時RKOを買収した大富豪ハワード・ヒューズが采配を振るっていたからに他ならない。飛行機と女性、それと映画に魅せられて情熱を注いだ謎と波乱に富んだヒューズの生涯は「アビエーター」(04)に映画化され、「大いなる野望」(64)のモデルにもなった。ヒューズはサイレント時代の末期に巨額の制作費をかけた「地獄の天使」(30)を初監督し、撮影中に3人のパイロットが事故死して自身も重



「海底の黄金」のロードショー時のパンフ。

「丸の内東宝」は当時開業したばかりで、現在はマリオンになっている。



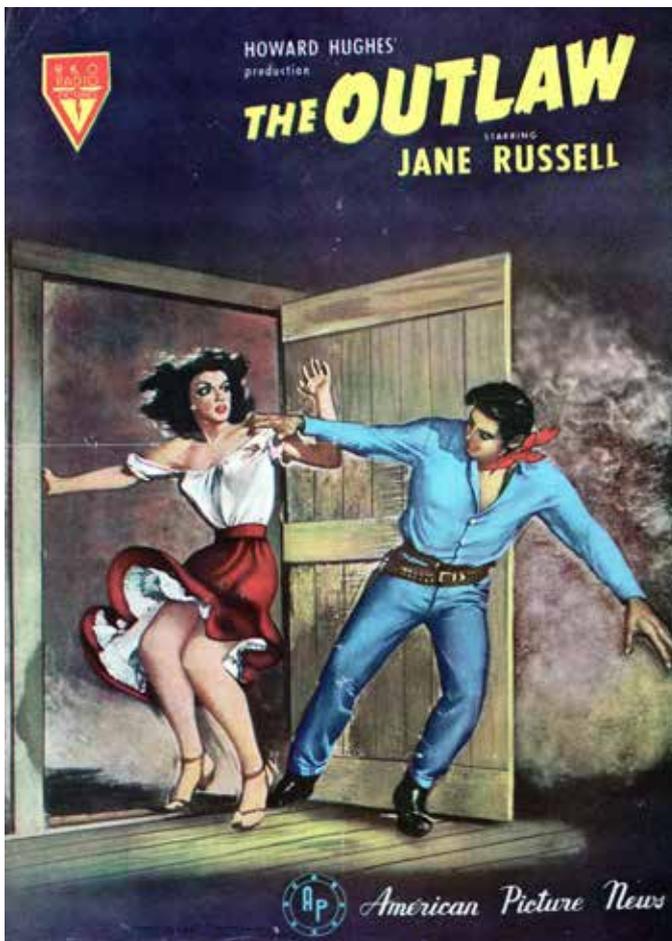
「海底の黄金」の別バージョンのパンフ。中身も少し違う。

いにしへの映画つれづれ⑮ 「海底の黄金」

傷を負った。ところが、完成直前にトーキーが到来。ヒューズは全編をトーキーで撮り直し、訛りがひどかったヒロインの代役に新人のジーン・ハーローを大抜擢した。破格の制作費こそ回収出来なかったものの、映画は大ヒットしてハーローはセックス・シンボルとして一躍注目された。その後も制作を手がけた「暗黒街の顔役」(32)も大ヒットし、実在の西部の無法者ビリー・ザ・キッドをモデルにした初監督の「ならず者」(43)が、ヒロイン役の女優の露出部分が過多で扇情的過ぎるとクレームがついて世間を大騒ぎさせた。その問題となった女優こそ、今回の「海底の黄金」でもヒロインを務めたジェーン・ラッセルである。ハーローはMGMでクラーク・ゲーブルと共演するなど活躍した一方、妖艶な役どころや露出の多さがたびたび問題になり、日本の映倫にあたる業界の自主規制ヘイズ・コードが制定されるきっかけになったともいわれる。ハーローは26歳の若さで急死したが、マリリン・モンローが登場

するまでプラチナブロードのセックス・シンボルとして長く語り継がれた。共に若死にした類似点も含めて何かと比較され、モノローの死後に時ならぬハーローブームが起きて、伝記映画が競作されるという現象まで起きた。ラッセルは、ヒューズがハーローの再来を狙って発掘した新人だった。母親が二流の女優だったラッセルは、当初女優志望ではなかったが宗旨替えし、歌手やモデル、歯科助手をしながら演劇修行中だった彼女の写真を見たヒューズに見出された。小柄なハーローとは対照的に肉感的な大柄グラマーで、圧倒的なボリューム感があり黒髪だった。「ならず者」もそれを強調して、当時としては露出部分も多く、何ともなまめかしいものだったため大問題になった。世間の耳目を集めて宣伝効果を高めることに長けていたヒューズの思惑通りのはずだったが、今回はちょっとやり過ぎた。ヘイズ・コードに引っかかったばかりでなく、宗教団体等からも激しく攻撃されて上映中止に追い込まれ

る事態にまで発展して、自らの所業で制定されたヘイズ・コードに再び首を絞められる結果となった。そのため法廷闘争に3年を費やしたが、映画はヒットしてラッセルはにわかに脚光を浴びた。戦時中、ヒューズが大量にばら撒いた写真も功を奏して兵士たちのピンナップ・ガールとしても絶大な人気を博した。やはり新人のビリー・ザ・キッド役のジャック・ビューテルが大した人気も得られず、ほとんど一発屋に止まったのは大違いだった。ほぼ見てくれとお色気だけで演技的にも未熟だったハーローとは違い、ラッセルはそれなりに芸達者で、♯ボタンとリボン♯がアカデミー主題歌賞を得たパラマウントの「腰抜け二挺拳銃」(48)では、実在の西部の女傑カラムティ・ジェーンに扮して、大物のボブ・ホープと堂々と渡り合い、20世紀フォックスの「紳士は金髪がお好き」(53)ではモノローと共演。二大グラマー・スターの競演に観客は歓喜し、ラッセルの主演で続編の「紳士はブルーネットと



「ならず者」のパンフ。
どのヴァージョンもラッセルの露出を強調している。



「たぐいましき男たち」のパンフ。
ラッセルばかり強調され、主演のゲーブルも形なしだ(笑)。

いにしへの映画つれづれ⑮ 「海底の黄金」

結婚する」(55)も制作された。所属のRKOで立体映画の3Dミュージカル「フランス航路」(53)にも主演し、「海底の黄金」はラッセルの全盛期の作品である。制作陣に名前こそ出ていないが、実質的にはヒューズが制作総指揮している。当時のRKO作品は、ヒューズが再編集を行うなどほぼ一存で決められていた。ヒューズらしくキワモノ的な作品が多く、犯罪メロドラマの「犯罪都市」(52)も「マカオ Macao」(52 未)もお気に入り。ラッセルのために制作されたような映画で、彼女の魅力を顔に観客を呼ぼうとする下心が見え見えだった。本作でも最大の売りであるラッセルの肉体美が存分に披露され、設定が設定だけに文句の出る余地もなく、さすがにうまいこと考えたものだ(笑)

お話の方は他愛のないもので、宝探しに熱中する元海軍のフログメン、ジョニー(リチャード・イーガン)とドミニク(ギルバート・ローランド)が発見した、キューバ沖に沈没したスペイン船に眠る財宝を巡る争奪戦。夢ばかり追っている夫に批判的だったジョ

ニーの妻テレサ(ラッセル)も成り行きから手伝うことになり、これに独り者のドミニクが好意を寄せる雇い主の借金に苦しむヨットの管理人グロリア(ロリ・ネルソン)や、横取りを狙うフカ漁師らが絡む。見せ場はもちろんアクアラングを付けたラッセルの水着姿。危険な引き上げ中にジョニーやテレサが挟まれて間一髪となるスリリングな場面や、漁師たちとの乱闘もしっかり用意されまさに冒険活劇だ。ただ、海岸での漁師たちとの格闘シーンは、まだやってるの?というくらい続いてちょっとしらけた。「RONIN」(98)でもカーチェースが延々と続いたが、こちらは「グランプリ」(66)等も撮ったアマチュア・カーレーサーでもあった監督のジョン・フランケンハイマー自らがハンドルも握った入魂の演出で、実写による迫力は見応えがあった。それに比べ、いくら昔とはいえ、海岸の乱闘はかなり間が抜けていた。「ブラボー砦の脱出」(53)で日本デビューした監督のジョン・スタージェスは、「日本人の勲章」(55)や“決闘3部作”と呼ばれる「OK

牧場の決闘」(57)「ゴーストタウンの決闘」(58)「ガンヒルの決闘」(59)の他、「荒野の七人」(60)や「大脱走」(63)等の切れのいい男性アクションの名匠。そのスタージェスとも思えず、ある意味、黒歴史なのかもしれない。もっとも、起承転結に沿ったメリハリのついた演出で上手くまとめ上げ、技術的にも難しかったワイド画面の水中撮影を成し遂げた手腕はさすがといえよう。スティーブ・マックィーン「ブリット」(68)を監督して名を上げたピーター・イエーツの「ザ・ディープ」(77)も同じような設定だったが、ヒットした割には当時人気のジャクリン・ビセットの水着姿以外は見るべきところもなく、退屈でさえあった。それに比べれば、シンプルに徹して見せどころを押さえている分「海底の黄金」の方が素直に楽しめる。

その後もラッセルは、「たくましき男たち」(55)で大スターのクラーク・ゲーブルと共演するなどしていたが、古巣のRKOはヒューズの専制的な手法で混乱を来して57年に制作を中止し、事実上、倒産した。年齢的



「ならず者」の騒動の顛末を掲載した、珍しいRKOが出していた冊子。ラッセルを表紙にした号が多く、ヒューズのご執心ぶりが判る。

にも盛りを過ぎたラッセルも一線を退いて、以後はラスベガスやニューヨークの舞台に活躍の場を移し、映画にはたまに出演する程度となった。もっとも、ヒューズとの準専属契約は続いていて後年まで週千ドルを受け取るようになっていたという。ヒューズとの関係については、酔って寝ていたラッセルに襲いかかろうとしたヒューズを一喝してからは同様なことはなく、噂されたような男女関係はなかったようだ。見かけ通りの豪放磊落な気のいい女性だったらしく、検閲問題でやり玉に挙げられた際も、「隠すから汚くなるので、太陽の下に照らすほど綺麗になる」と平然としていたという。マスコミが不仲を予想（というより期待？）したモンローとも親友となったばかりか神経質な彼女を庇い、友情はモンローが亡くなるまで続いた。私生活でも、熱心なクリスチャンで、養子縁組の支援活動に邁進して、2011年に89歳で死去した。

若くして非業ともいえる謎の死を遂げたジーン・ハーロー、不潔恐怖症が高じて世捨て人ようになったまま寂しく逝ったヒューズに比べ、それなりに幸福な生涯を送ったのも明るい性格ゆえだろう。

夫役のリチャード・イーガンは戦後にデビューし、たくましい体躯で西部劇やアクション等の主にB級映画で活躍。主演の「テーブル・ロックの決闘」(56)や仇役を演じた「フォート・ブロックの決斗」(59)、プレスリーの映画デビュー作「やさしく愛して」(56)では長兄を演じ、60年代以降はシリーズ物の「大牧場」(62～63)をはじめ、「大魔境突破」(日本では67年に劇場公開)等の長尺のテレビ・ムービーでも活躍した。しかし、有名作が少ないことやアクの強いマスクの割に印象が薄く、B級っぽさも災いしてか日本の俳優年鑑から落とされたりして知名度は低かった。一番知られているのは、本欄の④(23年8月号)でも紹介した「避暑地の出来事」(59)のサンドラ・ディーの父親役で、「海底の黄金」と共に夏が似合い縁も深い男である。ただ、まったくの金づちだったそうで(笑)、「海底の黄金」では猛特訓を受けて撮影に臨んだという。ラッセルとのコ

ンビは好評だったらしく、20世紀フォックスの「流転の女 The Revolt of Mammie Stover」(56 未)でも再共演している。

相棒役のギルバート・ローランドは闘牛士の息子としてメキシコで生まれ、サイレント時代には「椿姫」(27)等で主演スターとして活躍したが、トーキーの到来で没落して脇に回り、長く不遇の時代を過ごした。しかし、戦後になると「悪人と美女」(52)「雷鳴の湾」(53)「十二哩の暗礁の下に」(53)等で軽妙な脇役として再び注目されて重宝されるようになり、晩年まで長く出演を続けた。こちら、ラッセルとは「フランス航路」で相手役として共演している。トーキーで没落したスターのほとんどは再起することはない、端役に甘んじたり、寂しく消えていった。同じメキシコ出身でサイレント時代に二枚目スターとしてもはやされた「ベン・ハー」(27)等のラモン・ノヴァロも同様で、晩年は失業保険で細々暮らしていた。しかし、大金を持っていると噂され、何と押し入った強盗に惨殺されてしまった！同性愛が絡んでいるともいわれるが、その悲惨な死は世間に衝撃を与えた。そうした中でローランドの復活は稀有な例で、やはり人間長生きをした方が得なようだ。

「海底の黄金」

1955年 アメリカ カラー

Underwater !

監督 ジョン・スタージェス

出演 ジェーン・ラッセル

リチャード・イーガン

ギルバート・ローランド

ロリ・ネルソン

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

あの日、未来は明るかった。――
慌ただしくもほっとりと、現代人の郷愁を誘う
「昭和30年代のマスカルチャー」

ケーシー先生やカ通山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぴいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の銘柄の馬肉100%コンビーフや怪しい匂いアイスは売られ、食の安全はそっちのけ状態。「古き良き昭和」ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいまきと誇ります。

付録ムービー テレビ・芸能	食	26. 輝くマテル
1. テレビの青春時代	13. モナカカレーと「少年ジェット」	27. 集まった金庫のモデルガンを
2. 新編大スターアメリカのドラマ	14. アメリカンドッグ車始めのトシネード	28. プラモデル物中時代
3. アトムのカ通山	15. ハンバーガー一冊の歴史	社会・文化
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」	16. スズパチは始まる物?	29. ケネディの時代
5. コマソンの女王 橋トシエ	17. 輝のワトルミン	30. 外車愛蔵記
家電	18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ	31. 国産車は船車?
6. 電気釜の裏うつ	19. 粉未ジュース感懐記	32. サンドイッチのような車の三角窓
7. カラーテレビ狂想曲	20. 傑作! 噴水型ジュース自販機	33. デパートはワンダーランド!
8. リモコンテレビが欲しい!	21. 10円アイスクリームが花盛り	34. 町の映画館
9. クーラーをひたすまま寝ると死ぬ!!	22. 消えたガムつれづれ	35. 折りたたみ式コップ
10. ホラロイドカメラ	23. 飲の手裏剣	36. 月待マンガ郎と特撮
11. 可愛いワジベトカメラ	24. 2B筆とクラッカー	37. ベラベラのソノシート
12. 8ミリフィルム	25. 観玉鉄砲の王道	

当書DVD版は、月刊FDI編集部にて
本文：108ページ / 映像：2分23秒 2012年9月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980円(税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F
TEL.03-6379-8890 FAX.03-6379-6190 info@uni-w.com